



## 製造本部 執行役員対談

「人と技術がつながる、  
持続可能なものづくりへ」

～吸収合併と本部制への移行を通じた持続的成長への取り組み～

2026年1月、千住金属工業株式会社はグループのリソース集約による事業競争力の一層の強化を目的として主要関連会社である千住電子工業株式会社および千住技研株式会社の2社を吸収合併しました。これに合わせ、迅速な意思決定と組織横断的な連携強化のため、本部制へ移行しています。今回は新しい事業体制の中での「ものづくり」をテーマに、製造本部を牽引する二人の役員が対談しました。製造現場での取り組みと今後の展望について語ります。

常務取締役  
執行役員製造本部長  
奥野 哲也

副理事  
執行役員製造副本部長  
畑澤 健

### 新しい事業体制によって 製造現場にはどのような変化が生まれていますか。

**奥野** 関連会社単位で運営していた組織を吸収したことで、情報共有がこれまで以上に活発になり、連携を深めやすい環境づくりが進みましたね。同じ製品を製造している拠点間では積極的に人材交流を行っています。例えば、栃木の工場で経験を積んできた社員に、これまで別会社であった宮崎工場ならではの特徴を自分の目で実際に見てもらっています。そこで当たり前だと思っていたことがそうではないという新たな気づきを得るなど、視野を広げ、技術やノウハウの共有が進みやすくなったと感じています。

**畑澤** 拠点間での人材交流にはもう一つ大きな意義があります。他拠点での業務を経験することで、組織全体を俯瞰して見られるようになり、本人のキャリア形成につながると考えています。私自身も国内異動や海外赴任を経験していますが、実際に異なる環境で働くことで、新しい発見や成長の機会が数多くあります。社員自身の可能性を広げる取り組みとしても期待しています。

**奥野** 今後はこの拠点間の人材交流を他の製造部署にも拡大して、いずれは国内拠点だけでなく海外拠点も含めた取り組みへと広げていきたいですね。国内外拠点間での積極的な人材交流を通じて、グローバルで一体となった製造本部の体制を構築していければと考えています。

### 持続可能なものづくりにおいて 製造本部はどのような取り組みを進めていますか。

**奥野** 将来的に労働人口の減少が確実となっている今、私たちが推し進めている取り組みの一つが自動化です。自動化によって生産効率と品質の安定性を向上させるとともに、作業者にとってより安全で快適な作業環境の改善につなげています。現在も手作業が行われていて、自動化による効果が見込まれる工程についても、一つひとつ着実に自動化を進めています。

**畑澤** 私が工場長を務めている兵庫の工場では、新たに立ち上げた製造ラインで現場に人がいなくても生産できる体制のモデルケースづくりに取り組んでいます。カメラやセンサーによるモニタリングを行い、製造データの自動収集などを活用し、特に高温環境や騒音の大きい工程では、人が常時現場で作業する必要のない職場づくりを目指しています。この工場はまだ新しいため、長年積み上げてきた実績がある他拠点の製造ラインと比べて根本的な見直ししがやすく、また比較的規模が小さいことから設備投資も抑えられ、自動化のトライアルがしやすい環境だと感じています。ここで効果を確認した実践的な取り組みを他の拠点へ展開するなど、自動化推進において先行的な役割を担っています。

**奥野** 他の例として、製品ごとの異なる配合やさまざまな製造パラメータ管理が非常に重要となる製造工程では、

## POINT

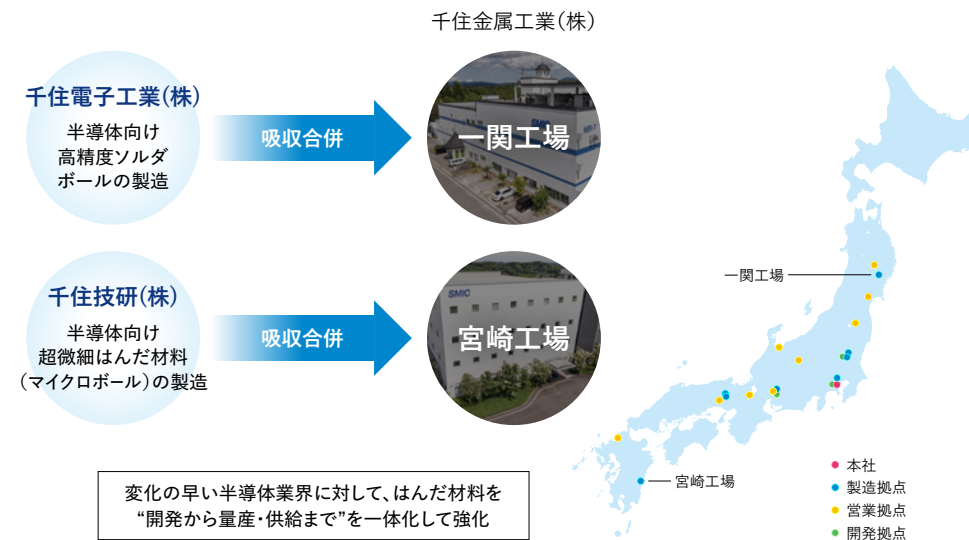
## 吸収合併によるリソース集約と相乗効果

## 1. 経営資源の集約による体制強化

これまで各関連会社ごとに分散していた人材・技術・ノウハウを千住金属工業のもとに集約、一体的な事業運営が可能になりました。

## 2. 拠点間連携による製造力の向上

各拠点の特長を生かした取り組みの推進と、人材・技術交流による連携強化を通じて、高水準かつ強固な製造体制の実現を目指しています。



従来は作業者が手順書を確認しながら作業を行っていました。宮崎工場では、この工程に品名やバーコードを読み取るとシステムが適切なタイミングで手順を指示し、製造設備のパラメータも自動的に制御する仕組みを導入しています。これにより、作業者の経験に頼ることなく、誰もが安定した品質で製造できる環境づくりが進んでいます。このような取り組みも他拠点へ拡げていく予定です。また、将来的には現在も手動で行っている手順まで含めたさらなる自動化も視野に入れています。

**畑澤** 目指すところは、人が常時現場にいなくても安定して製造できる環境ですね。それが実現すれば、生産において人の常駐を前提とした空調や照明が不要になりますし、24時間稼働により需要の変動にも臨機応変に対応できるようになります。



ただし、自動化も設備を導入してすぐに効率が上がるわけではなく、人がさまざまな工夫をしたり、データ解析をしたりしながら能力を高めていかなければなりません。そのため、イレギュラーが発生した際の対応や自動化設備のアップデートなどについては、今後も人が重要な役割を担っていくことになると思います。

自動化やデジタル化が進む中で  
社員に期待することは何でしょうか。

**奥野** 社員にはこれまで以上に発想力や次の改善につながる分析力、解析力を期待しています。自動化というと、人の仕事を機械に置き換える取り組みと捉えられがちですが、私たちはそうは考えていません。むしろ、人が単純作業から解放されることで、新たな技術の導入や工程改善など、より付加価値の高い仕事に力を発揮できるようになることが重要だと考えています。

**畑澤** 例えば自動化された工程では、さまざまな製造条件が常に計測されているので、正確で詳細な製造データが自然に蓄積されるというメリットがあります。今後はAIの活用によって、そのデータをさらに効率的に分析できるようになるでしょう。ただ、その結果を生かして成果につなげるのは、やっぱり人なんですよ。蓄積されたデータを正しく迅速に分析・解析して問題点や改良点を見つけだし、そしてより良い工程や製品へと発展させていく。人とデジタル技術がそれぞれの強みを発揮して、結果につなげていくのが大切だと考えています。

**奥野** 最新技術と過去の経験との組み合わせという観点では、「失敗案件の再チャレンジ」にも取り組みたいと思っ

ています。過去にチャレンジしたものの、技術的な課題などによって途中で断念した取り組みがたくさんあるんですよ。以前は実現できなかったことでも、今の技術であれば実現できるかもしれません。社員には新しい技術やツールを積極的に活用しながら、これまでできなかったことに再チャレンジしてほしいです。過去の失敗を諦めたままにするのではなく、今の技術水準で改めて見直してみることで、新たな価値の創出につなげていきたいと考えています。

ものづくりを取り巻く環境には  
どのような課題がありますか。

**奥野** 現在、課題の一つになっているのが調達リスクです。国際情勢の緊張により、世界的にサプライチェーンへの影響が生じています。日本は天然資源の多くを海外からの輸入に依存しているため、その影響が非常に大きく、当社も例外ではありません。当社は多くの鉱物資源を扱っていますので、金属材料のリサイクル率向上によって一次資源の影響を抑制し、サプライチェーンのリスク低減を図っています。

**畑澤** 金属材料のリサイクルについては、資源循環の観点からも重要な課題の一つと考えています。資源を一度使って終わりにするのではなく、回収し、再利用しながら価値を生み出していく。そのような循環型のものづくりは、今後ますます重要になっていくと思います。当社では約30年前から協力会社である(株)高橋合金と連携し、はんだリサイクルに取り組んでいます。今後もさらに発展させていきたいと考えています。

環境面ではどのようなテーマに取り組んでいますか。

**畑澤** 法規制への対応はもちろんですが、環境負荷低減に向けた取り組みを継続的に進めています。化学物質管理の強化やPFAS対応、洗浄工程で使用する化学物質の見直しなど、工程で化学物質に接する従業員の健康管理も含め、安全で持続可能な製造環境の構築に取り組んでいます。

**奥野** GHG排出量削減の面では、従来の省エネルギー活動とともに再生可能エネルギーの活用を推進しています。また、自社の排出量削減だけではなく、当社の製品をお客様が使用される際の排出量低減に対する提案にも力を入れています。低温はんだはお客様の製造工程における消費エネルギー削減に大きく貢献できますし、製造ラインでの窒素使用量を削減できる製品など、環境価値が高い製品ラインアップの拡充にも取り組んでいます。



これからのものづくりを支える人材に  
期待することを教えてください。

**奥野** 一番期待しているのは「失敗を恐れず積極的にチャレンジする姿勢」です。技術も社会も大きく変化しています。そうした変化に遅れずについていくためには、変化に臆せず果敢に挑戦し続けることが重要だと思います。

**畑澤** 「素直さ」と「コミュニケーション力」も大切です。ものづくりは一人ではできません。部署や拠点、世代を超えて協力しながら課題を解決していくことが求められます。上下左右のコミュニケーションを大切にできる人材が、これからますます重要になると思います。

最後に、製造本部が目指す未来像を  
お聞かせください。

**畑澤** 目指すのは、「人と技術が高度に連携した次世代のものづくり」です。単なる省人化にとどまらず、自動化によって社員のポテンシャルを最大限に引き出すことで、これまででは決して到達できなかったレベルの品質や安全性、働きやすい職場環境を実現できれば、と考えています。  
**奥野** 労働人口の減少や環境問題など、社会課題は今後さらに大きくなっていきます。そうした変化に対応できる強固でレジリエントな事業基盤を構築するために、製造本部が果たす役割は非常に大きいと考えています。国内で先行して進めている自動化や管理システムを海外拠点にも展開し、グローバルで高水準のものづくりができる体制へと進化させていきたいですね。

POINT  
本部制による機動的な事業運営

1. 一体運営体制の構築
- 本部制への移行により、市場動向や経営環境の変化を全社で迅速に把握・共有し、一体的に対応できる体制を整えました。個別事業の枠にとらわれることなく、全社最適の実現に向けた経営を推進します。
2. ガバナンス・コンプライアンスの強化
- 全社横断でガバナンスとコンプライアンスの強化を推進しています。共通の方針・ルールのもと、統一した管理体制でリスク管理と法令遵守を徹底し、透明性と信頼性の高い事業運営を実現していきます。

